

児童養護施設におけるソーシャルスキルトレーニングの実践と効果に関する研究

—子どものQOL尺度を用いて—

○ 特定非営利活動法人 JAM ネットワーク 高取しづか (00830)

神奈川県立保健福祉大学

新保幸男 (00172)

児童養護施設、ソーシャルスキルトレーニング、QOL

1. 研究目的

児童養護施設には虐待、ネグレクトなどで入所する児童が増加している。生育歴の中で気持ちを伝える言葉かけをしてもらった経験が乏しく、心とはうらはらに雑な言葉や反抗的な言葉を吐き人間関係がこじれていく児童もいる。入所児童の自立支援としてソーシャルスキルトレーニング (Social Skills Training SST) の必要性が増している。筆者を代表とするグループは 2008 年から SST の技法を取り入れた「ことばキャンプ」の実践を行ってきた。児童の自尊感情がはぐくまれ意欲的になったなど児童の変化が実施施設から報告されている。そこで、SST ことばキャンプの実践が児童にどのような効果をもたらすのかについて検証する。

2. 研究の視点および方法

研究の対象は、東京都、神奈川県、千葉県の 19 の児童養護施設に入所している小学生 (4~6 年) 175 名 (有効回答 127 名) を対象とした。参加児童は、施設の職員が入所児童の該当学年の児童に声をかけて、児童の意思を確認して合意のもとに決まった。

児童の変化の様子を測る尺度には様々なものが開発されている。児童の行動や情緒面の特性について明らかにする尺度、社会的スキル測定尺度、自尊感情測定尺度等について検討した。その結果、子どもの QOL 尺度として開発された KINDL[®]を採用することにした。KINDL[®]は、信頼性、妥当性が認められており、

児童への心理的な負担が少ない点をもっとも重視した。下位領域は「身体的健康」「精神的健康」「自尊感情」「家族」「友だち」「学校生活」の 6 領域ある。「自尊感情」の項目や「家族」「友だち」「学校生活」といった対人関係についての問いが含まれている点も考慮した。

測定方法は、SST ことばキャンプ (全 6 回。約 3 か月を要する) を始める前と終了後の計 2 回、参加した児童は QOL 尺度 KINDL[®]に自記入で回答する。児童を担当する職員には養育者版 KINDL[®]に養育者評定法で回答を求める。KINDL[®]は 6 つの下位領域で構成されており、それぞれ 4 項目ずつ合計 24 項目の質問がある。質問には 5 件法で回答する。得点は 0-100 に換算して扱う。

3. 倫理的配慮

児童が特定されることのないよう、施設ごとの通し番号で ID 化して連結可能匿名化し、対照表は研究者が保管する。児童の自由意思を尊重するため、職員から児童に口頭でアンケートはあくまでも自由意思であること、途中でアンケートをやめることができること、アンケートを拒否してもことばキャンプには参加できることを伝えていただく。

本研究は、神奈川県立保健福祉大学倫理委員会に申請し承認を得て実施した (保大第 7-2、保大第 25-34、保大第 10-5)。

4. 研究結果

①SST 実施前後の得点を比較すると、介入に

よって変化がみられた。QOL 尺度総得点と下位尺度 4 項目の得点が上昇し、1 項目が下降した。1 項目は同位であった。

介入後の方が上がった項目では、「総 QOL 得点」と「自尊感情」は有意に高くなっていた。「家族」「友達」の項目は、高い有意傾向があった。逆に、介入後「学校生活」は有意に低くなっていた。

②KINDL[®]の標準化に向けて行った全国 19 校の小学生を対象にした調査がある。今回、小学 4-6 年生 2,249 名（男児 1,127 名、女児 1,122 名）のデータを「対象群」とし、研究のデータと比較を試みた。

介入前に「対照群」と比較したところ、入所児童の「学校生活」以外は「対象群」を下回っていた。とくに「自尊感情」は大きく下回っていた。介入後は「家族」「友達」が「対照群」を上回った。大きく下回っていた「自尊感情」は「対照群」に近づいた。一方、介入前に「対照群」に比べて顕著に高かった「学校生活」は、介入後「対照群」と並んだという結果になった。

③入所児童の「自尊感情」についてさらに分析を進めた。介入前の「自尊感情」の得点を度数分布でみると、得点が 0 に近い者から 100 点満点の者まで、分布の幅が大変広くばらつきが大きかった。極端に低い自尊感情の児童がいる一方で、きわめて自尊感情の高い児童がいることがわかった。介入後の「自尊感情」が高くなった児童は、62 名、低くなった児童は 47 名、変化なしが 18 名だった。

5. 考察

①今回の結果では、SST 介入によって入所児童の生活全般の主観的満足度である総得点が上がり、「精神的健康」「自尊感情」「家族」「友達」が上昇していた。特に「自尊感情」

は、介入前の得点との差に有意に上昇という結果になった。職員の記録に「自信をもって行動するようになっている」「自分で決めるようになった」とあり、児童に自信が生まれ行動に変化が出ていることは検証できたのではないかと。

一方で「学校生活」が、介入後に大きく下がっていた。学校生活での満足度がなぜ下がったのか、今後の研究の課題としたい。

②介入前は「対照群」と比較して入所児童の「学校生活」を除くほとんどの項目が低いことがわかった。ただ「家族」と「友達」はやや低い程度であり、介入後には「対照群」を上回っていた。施設内での養育者である職員や生活を共にする友だちとの関係の中で、入所児童が現在の生活の中に居場所を見つけ、たとえ喪失体験や環境の大きな変化があったとしてもそれを乗り越えて、生活に満足を感じていることがうかがえる。

入所児童の 6 割に被虐待体験があることから「自尊感情」は「対照群」に比べて低いという通念をなぞった形となった。しかし介入により改善し「対照群」に近づいている。

③「自尊感情」得点が極端に低い児童については、虐待体験との関係について多くの研究で明らかにされている。一方、高すぎる「自尊感情」については 2 つの要因が考えられた。1 つには「こうありたい」とする自分の願望 = 自己像とそれを評価する自分の基準によって、自尊感情が決まるという自尊感情の構造と関係していること。2 つ目は、自己を把握すること自体が困難な場合があるのではと推察した。介入により変化があったが、自尊感情は高いから良いと決めつけるのではなく、それぞれの児童の成長にあっているか「質」を見ていくべきである。